

⑭ ボランティアが中心となって運営する「花の里」

1 住民と連携しての定期訪問事業とボランティアの育成・支援

南区では、平成六年から、全国に例のない「高齢者定期訪問事業」を始めている。

一人暮らし・寝たきり高齢者約三千人を対象に月一回程度の定期訪問を行うため、住民委員総勢五百人以上、保健所・福祉保健サービス課の係長以上十四人を十四地区に配置し、相互に密接に連携するシステムを作り上げた。住民の委員は担当地区の高齢者を訪問し、話し相手をつとめ、病状を観察し、その状況を行政の担当者へ報告している。この定期訪問は、災害時の老人救済などのネットワークとして機能することも狙いという。

この結果、住民の委員も行政職員も、高齢者に関する福祉問題及び保健問題を共通に取り扱うことになり、総合的な判断に基づいて、南区独自の試みが次々と展開されている。

この定期訪問事業は、市全体で高い評価を受け、平成八年度からは全区実施となった。また南区では、在宅支援等の取り組みを進めるために、盛んに講習会を開催している。

ボランティアとして活動する人を育成するほか、一般の人に、広く知識・関心を持つってもらうことも狙いとしている。

ボランティアには、各自の能力や専門性を活かした活動をしてもらえるよう、きめ細かなコーディネートを行っている。

八年度からは、ボランティアの活動交流拠点として「ボランティアフォーラム・みなみ」を開設した。コーディネーターが常駐し、送迎、小修繕、配食などの手配のほか、情報提供などのサービスをスタートしている。

2 市民による痴呆性高齢者へのデイサービス活動

痴呆性高齢者のデイサービスには高いニーズがあり、在宅介護が家族に大きな負担となっていることは、定期訪問活動からも浮き彫りになっていた。しかし、公共施設ではとても対応しきれず、各地でボランティアによるデイサービスの活動が見られる。区内でも「道草の会」や、「南の里」などのグループが平成五年頃から活動を始めているが、いずれも、地域ケアプラザなどの場所を借りる形で、週一〜二回、利用者が五〜十名と限られたものであった。

平成六年、市社会福祉協議会は、こうしたデイサービス活動グループのネットワークづくりを開始。そこでも、①ボランティアをバツ

クアップするスタッフなどの「人」、②常時利用できる「場」、③活動・運営の「資金」の不足が大きな問題点としてあげられていた。

3 地域の人材と空間を活かした「花の里」づくり

南保健所は、こうした痴呆性高齢者のデイサービスグループの窓口になっていた。保健係長は、ボランティアが、行政支援のほとんどない状態で色々な問題を抱えていたことを肌で感じており、支援ができないかと考えていた。折から個性ある区づくり推進費が創設され、これを活用して痴呆性高齢者のボランティア活動を支援しようと、企画書を作成（平成六年夏）。精神保健担当など周囲の職員と共にイメージをふくらませていった。

平成七年一月頃からプロジェクトチームで、知恵を出し合った。メンバーは、区の保健課、福祉保健サービス課、地域福祉課職員、「道草の会」「南の里」など痴呆性高齢者のデイサービスを実践していたボランティア・グループのメンバー、大岡地域ケアプラザ、社会福祉協議会、具精神保健センター、総合保健医療センターの職員などであった。

はじめは漠然としていたが、毎日利用でき



データ	
事業主体	南区痴呆性高齢者デイサービスセンター運営委員会
関係部局	南区福祉部、南区保健所
施設の名称・面積	南区痴呆性高齢者デイサービスセンター 『花の里』、床面積/129㎡
施設の位置	国庫補助対象事業（デイサービス事業Eづけ型）への移行
事業期間	平成6年度/ボランティア募集・養成、部屋の改造（区づくり推進費） 平成7年5月開所
参加形態	施設のハード・ソフトのイメージづくりへのボランティア経験者の参加、運営委員会（地域役員、医療関係者等の参加）、運営送迎スタッフボランティア

る場所を整備する、密度の高い介護と地域に密着した運営のためボランティアを養成する等イメージが固まり、実現への条件を整理していった。担当者は、「痴呆性高齢者デイサービスセンターを地域につくりたいという思いが集まり自然とできあがった。形式から入ったら実現できなかったらどうだろう」という。

この結果、民間のマンスションの借り上げによって場を確保するとともに、運営はボランティアが中心となって行うという画期的な方法で、痴呆性高齢者のデイサービスセンター「花の里」が実現することになった。

高齢者に直接対応するのはボランティアだが、これを支えるため、運営委員会方式を採用し（事業主体。地域の保健・福祉・医療等の関係団体やボランティア代表等がメンバー）、常勤及び非常勤のスタッフ、行政側の連絡調整会議などの体制が整えられた。

また、借りた部屋は少ない予算の中で明るく温かい雰囲気が出るよう、絨毯敷の広間の一隅に畳をもうけ、会食のできるテーブルと椅子、小さな厨房などを設置した。

4 ボランティアによる手づくりの運営

運営の中心となるボランティアの募集・養成のため、平成七年三月の連続講座を皮切りに、何回か講座を開いた。この受講者の中の有志が「花の里」の運営に参加することになった。「南の里」等の経験者も何人か参加してくれたのでスムーズにスタートすることができた。

毎日のプログラムは、スタッフとボランティアが相談して決めていく。曜日によってボランティアや利用者の組合せが異なるが、メンバーの個性を反映して、それぞれの雰囲気があるという。ボール遊びや歌など皆で楽しむプログラムを工夫しているが、進行管理しているというような施設にありがちな雰囲気はなく、一対一で相手の様子を見ながら適度に話しかけたり触れ合うことで、のんびりと落ち着いた雰囲気が出ているのも、ボランティアの手作りプログラムの良さである。

また、送迎は利用者の通所を促す重要な要素であるため、車椅子対応の送迎車を用意するとともに、新たに募集を行い、送迎ボランティアグループ「南の風」が誕生した。送迎は、車の運転だけでなく、乗り降りの介助や個人の状況を判断しての出迎えなどきめ細かな配慮を行っているという。

5 今後の展望―「花の里」型ケアセンターの普及

花の里は、平成七年度、区づくり推進費を使った区独自の活動補助事業としてスタートしたが、たまたま国庫補助対象事業であるデイサービス事業に、痴呆性高齢者を対象として基準を弾力化した「E型」ができることになり、その基準をクリアしていたので、平成八年度からは、国庫補助事業による市の施設としての位置づけに移行した。これによって継続的な運営が可能になるとともに、予算も増えスタッフを充実し、利用料を下げることもできた。E型になって三年後には、運営主

体を法人にすることが義務づけられているが、ボランティア中心の運営が変質することはないだろう。

花の里のようなデイサービス拠点に対するニーズは今後ますます高くなると予想される。施設建設型に比べると財政負担は圧倒的に少なく、サービス密度は高い。南区でも第二弾をねらっているが、横浜市全体としても今後有望な方法であると言えよう。

図 パートナーシップに基づく南区在宅支援の流れ

